

第14回アジア太平洋災害医学会シンポジウムで講演しました（2018/10/16－18）

テーマ：災害医学の備えと対応に橋をかける
会場：ホテル舞子ヴィラ（神戸、日本）

2018年10月16－18日（火－木）に神戸で開催された第14回アジア太平洋災害医学会（APCDM）において、災害医学研究部門の江川新一教授がWHOの企画するWKCフォーラムのシンポジウムと円卓会議に登壇しました。アジア太平洋災害医学会は、2年に1回開催され、約30年前に救急、外傷、人道支援などを実践する医師たちのイニシアチブによって形成され、今年で14回目となります。阪神淡路大震災を乗り越え、わが国における災害医療の中心地のひとつとなっている兵庫県災害医療センターの中山伸一先生が会長となって、35か国から522名の参加者がありました。

WKCフォーラムは、同じく神戸市にあるWHO健康開発総合研究センター（愛称：WHO神戸センター(WKC)）がAPCDMと共同で『健康危機管理と災害リスク管理における科学的エビデンスの進展にむけたグローバルアクションーアジア太平洋地域からの貢献ー』をタイトルにして企画し、1日目はシンポジウム、2日目にWorld Caféも取り入れた円卓会議が行われ、災害医療という複雑で応用が必要な領域において、いかに科学的な根拠（エビデンス）の形成と活用を進めるかについて議論がなされました。

シンポジウムは3部構成で行われ、第1部は災害医学の現状に関して、仙台防災枠組における健康危機管理、WHOが推進する災害と健康危機管理、災害医学研究の重要性、災害時の緊急医療援助チームの医療情報管理、ASEANで行われている災害医療の標準化（ARCHプロジェクト）について報告されました。第2部では、災害リスク・健康危機管理研究のキーとなる領域について災害医療チーム養成、災害精神医療支援チーム、災害健康危機支援チーム、グローバル災害統計センターの役割について報告されました。第3部は災害後の精神社会的支援に焦点をあて、わが国の災害時メンタルヘルス対応、カナダの公衆衛生学的アプローチ、災害における看護師・保健師の役割、ARCHプロジェクトにおける精神社会支援について報告されました。

江川新一教授は、各国政府、国連開発プログラム(UNDP)、富士通と東北大学災害科学国際研究所が共同で開発しているグローバル災害統計センターの事業内容を説明し、世界各国における総合的な健康指標である平均寿命と、INFORM災害リスク指標が強く相関することを示し、健康な社会を作ることが災害に強い社会を作ることになることを強調しました。

多面的な実践的研究者により災害医学の現状が共有され、すぐれたシンポジウムとなりました。

2日目には、シンポジウムの登壇者に加えて、ARCHプロジェクト関係者、WHO地域事務所関係者などを含む円卓会議が開催されました。事前の打ち合わせにより、World Café形式が採用され、5つのトピックに座長と報告者を設定し、それ以外の参加者が20分参加して自由な雰囲気での議論を行い、20分後に座長と報告者以外は必ず他のトピックに移動するというやり方です。5つのトピックは、a. 災害後のデータマネジメント、b. 災害後の精神社会的マネジメント、c. 災害対応と災害リスク啓発、d. 災害リスク管理の保健医療従事者養成、e. 研究方法と倫理という5項目です。円卓会議の専門家に加えて、聴衆も自由に各トピックの議論に参加できます。1つの会場で5つの議論が大変積極的に進行了。最後に報告者が各トピックの議論をまとめて全員で共有し、災害医学の研究・教育のあり方についてのコンセンサスを形成することができました。このような試みは学術集会としてもまれなことであり、大変有意義なものでした。

学会は、災害医療に携わる多くの若い研究者・実践者にとっても貴重な発表の場であり、ポスターセッション、オーラルセッションでも多彩な発表がなされていました。先進的な技術の災害への応用について、ドローンを用いた発表も企業、行政、学術の面からなされました。仙台市は

緊急災害速報に基づいて自動的に飛行を開始し、避難の呼びかけや、被災地の情報把握を行うドローンを数年以内に実用化する見込みだと発表していました。災害医療におけるドローンの活用についてもいくつかの報告があり、運用に関するネットワークやコンソーシアムを形成して、運用や安全管理に関するコンセンサスを形成することの重要性が強調されました。

第 15 回 APCDM は 2020 年に上海で開催されます。災害が多いことを共有するアジア・太平洋地域で、さらなる保健・医療対応の備えや、ヘルス以外のセクターとの協働などにひきつづき貢献することが期待されます。



シンポジウム・円卓会議のメンバー



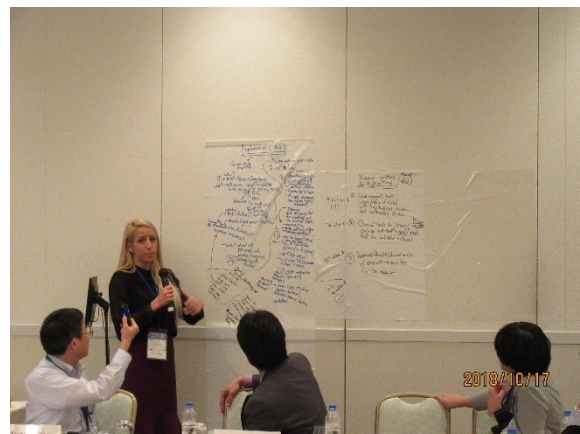
災害医療における WHO の役割について講演する WHO 本部の Jonathan Abrahams 氏



円卓会議で挨拶する WHO 神戸センター長 Sarah Barber 氏



5つのテーマにわかれ聴衆も参加可能な World Cafe 形式での活発な討論



プロダクトをまとめ、かつ解説する Rapporteur（報告者）

文責：江川新一（災害医学研究部門）